

篠崎隆雄作

ジャツピーは、春風に乗って

二幕

登場人物

山本翔太（三十八）タクシードライバー  
ジャネット（二十二）その妹  
明美（四十一）翔太の妻  
純一（二十一）アパートの住人、大学生  
茂夫（二十九）翔太の同僚  
幸三（五十七）同じく  
菊枝（六十五）アパートの住人  
松次郎（八十六）菊枝の友達  
信一郎（四十五）菊枝の息子  
晴美（十七）その娘  
小百合（二十一）純一の愛人  
明日香（四十）同じく  
恵（十九）同じく  
松本（四十二）暴力団員  
黒田（二十八）その舎弟  
恒子（六十八）翔太の叔母  
入国管理官一  
同 二

時、平成初頭。  
所、横浜。翔太のアパート。

第一幕

第一場

（紗幕前面で、タクシー。ドライバーたち  
の寸劇入りのコーラスとダンス。ドライバーバ  
ーたちは、出演者から適宜選ぶ）

♪ 俺たちタクシー・ドライバー

甘い潮風片頬にうけて

今日も走るよ港町

「はい、お客さん。あれが氷川丸。向う  
にみえるのがベイブリッジね」

「嫌よ、私は八景島に行きたかったの」

「山下公園っていったじゃんよ」

「シー・パラダイスがみたいの」

「お客さん。次のお客さん待ってるんだ

けど、喧嘩は降りてからにしてくん

「いかな」

「煩いわね」

「馬鹿野郎！」

♪ ああ、偶にお目玉食らうけど

でも、この仕事は止められない

俺たち浜のドライバー

紗幕が上がると、港近くの安アパートの二

階、翔太の部屋。ダイニング・キッチン（上

手）と和室（下手）からなる。上手にドア。

その表は廊下で、その横に洗濯機。向かいに

菊枝の部屋。翔太の部屋の先には、大学生順

一の部屋の一角が見える。その向かいにも部

屋があるのだが、これは現在使われていない。

廊下の奥に階段口。

翔太の部屋は、ドアに続いて手狭な三和土。

その横に調理台。上に小窓。冷蔵庫が続き、

折りまわして正面壁に沿って食器棚とカラー

ボックス。電話台など。カラーボックスの上

には招き猫の貯金箱。中ほどに救急箱。中央にテーブルとイス数脚。和室正面下手に押し入れ、上手に洋服ダンス。間に壁の一部がみえる。畳中央に万年床。下手にサッシの出入り口。その前面に引き出し付きの座り机。サッシの表はベランダで、若葉の銀杏の木の一部が見える。壁のあちこちに「目指せ、男だ、白ナンバー」、「欲しがりません、持つまでは！」などの標語を書いたビラ。

（春の早朝。部屋の中は薄暗く、和室下手だけにサッシを通して朝日が差し込んでいる。遠く汽笛の音。ややあつて、万年床が動き、布団の中からジャネットの細身の足がニョッキリと出る。ジャネットトは、フィリップナー。次に寝返りを打つと、派手なミニのワンピースから、派手な下着が見える。枕元に大きなバッグ。廊下を、翔太が肩にかけたタオルで汗を

拭きながらやってくる。手にコンビニのビニール袋。タクシードライバーである。

翔太

ウー、暑くなりやがったな。公園の桜が咲くのが、早えはずだ。(小窓を開けて、手探り)あれ?(ドアを開けて)あれエ、開いっちゃたよ。危ねえ、危ねえ。

泥棒様大歓迎ってとこだったよ。(中に入り、テーブルでビニール袋から弁当を出す)。それにしても、喉乾いたね。先ずは一杯と行くか。(冷蔵庫から缶ビールを出し、口を開けようとするが)ダメ、ダメ。此処は飲んだつもりで、二百三十円と。(ビールを冷蔵庫に戻し、ポケットをまさぐる。小銭を出して貯金箱に入れる。貯金箱を振ってみてニンマリ。弁当にかかろうとすると、ジャネットの寝言)。

ジャネット  
ウー。むにやむにや。

翔太 あん？

ジャネ (寝返りをうって) ウーン。

翔太 明美？戻ってきたのか。(和室へ行き)

なんだよ、ケツ丸出しで。へへへ、趣味

変わったのか。派手な下着付けちゃって。

(撫で回して、ピシヤリと叩く)。

ジャネ ギャオー(飛び起き)マリボック。

タガ。マサマン・タオ。

翔太 な、何だとオ。

ジャネ スケベ。バカ。エッチ。エロ爺。

翔太 エロ爺とは、誰のことだよ。

ジャネ ポリス呼ぶね。ゲッタウェイ。

翔太 警察呼ぶのはこっちの方だよ。誰の布

団で寝てんだよ。

ジャネ 誰の布団？

翔太 俺の万年床だよ、そこは。

ジャネ 何ね、それ？

翔太 ずーっと敷きっぱなしの・・・何で

俺が説明しなきゃなんねえんだよ。何で

寝てんだよ。

ジヤネ アイム、タイアード。ソウ、マツチ。  
翔太 何だ、タイガースだ。俺はベイスターズ  
ジヤネ ズのファンだよ。  
翔太 もしかして、翔太？お前、そうね。  
ジヤネ 気安くひとの名前呼ぶな。  
翔太 ヤマカン子供か？  
ジヤネ ヤマカン子供か？  
翔太 山本貫太郎。通称ヤマカンってのは確  
かに俺の親父だよ。  
ジヤネ オー、クヤ。(抱き着き)マイ・ブ  
ラザー。  
翔太 苦しい。放せ。何がマイ・ブラザーだ。  
ジヤネ 私、バタン・カパティッドナ・バ  
バエ。  
翔太 バタンとアツパーカットで、婆アが伸  
びただと。  
ジヤネ ノー。ノー。ユー、ブラザーよ。私、  
妹ね。  
翔太 妹だ。そんなもの持った覚えねえよ。  
ジヤネ ヤマカン子供作たよ。フィリピンで  
私のママと作たよ。それ、私。ジヤネッ

ト・シヨウコ。

翔太 シヨウコ？

ジャネ お前、シヨウタ。私、シヨウコ。何

よりの証拠ね。

翔太 おちよくる気か。

ジャネ 私、イナイいたよ。

翔太 いないのがいたとはどういうことだよ。

ジャネ イナイ、ママのことよ。ママ言たね。

日本、宇都宮、アマいるよ。

翔太 坊主の親戚はいない。

ジャネ アマ、パパのことよ。私、訪ねたね、

宇都宮。ヤマカン知る人見つけ回わたよ。

ヤマカン自殺、ほんとね。

翔太 バブルはじけて、会社潰れちまったか

ら。な、何で知ってんだよ。

ジャネ だから、探して聞いたよ。そのとき

クヤのこと知たよ。横浜でタクシーして

るて。探したよ。タクシー、沢山たくさ

ん乗たよ。クヤ、クヤ。(再び抱き着い

て泣く)。

翔太（困惑する）。

ジャネ 思い出したよ。証拠あるよ。（バツグの中から、絵葉書を取り出す）。

翔太 東照宮の絵葉書！

ジャネ サインあるね。これ読めるか？

翔太 アイラブユー。ヤマカン。

ジャネ だけ？

翔太 英語が出来たら、タクシーの運ちゃんやあってねえっの。

ジャネ じゃ、私日本語するよ。

翔太 英語出来んのか？

ジャネ 英語、スペイン語できなくてマニラ住めないよ。

翔太 そう言えば、おやじマニラへよく行ってたな。（壁の向こうから、すごいボリユームの音楽）

ジャネ マイケル・ジャクソン、煩いね。

翔太 朝ツばらから始めやがったな、盛りのついた犬が。

ジャネ ？

翔太 壁が薄いから、声消しにボリュウム上

げてんの。

ジャネ 声消し、何ね？

翔太 あの時の声だよ。壁に耳付けてみる。

ジャネ (耳をつけ) ウ、フフフ。

翔太 馬鹿。気持ち悪い声出して笑うな。そ

んなことより、英語訳せよ。いや、ちよ

っと待て。

ジャネ どちらよ。

翔太 おおい、うるせえぞ。大きな声出すな。

(激しく壁を叩く)。

ジャネ 何するね。お楽しみ、邪魔する、悪

いよ。

翔太 黙ってる。おい、順。こっちへ来い。

用があるんだ。来ねえと、乗り込むぞオ。

(ややあつて順一の部屋のドアが開き、

下着姿の順一が現れる)

順一 勘弁してくださいよオ。好いところだっ

たのに。  
翔太 何だよ。全ての精力抜き取られました。  
って顔して。何度言ったら分かるんだよ。  
俺はタクシ一の運転手だよ。二十四時間  
勤務なの。勤務開けたら、すぐぐっすり  
眠りたいんだよ。それを朝ッぱらから音  
出しやがって。  
順一 刺激的な声聞かせるより好いじゃない  
ですか。こっちだって気イ使ってたんだか  
ら。  
翔太 これから始めます、宜しくって宣言し  
てるようなもんじゃねえか。かえって気  
にかかって眠れねえんだよ。やるなら、  
俺の勤務中にやれよ。  
順一 自分勝手なんだから。  
ジヤネ ハイイ。  
順一 ハイイ。  
翔太 何だよ、馴れ馴れしく。  
ジヤネ 私、困たよ。この人、鍵開けてくれ  
たよ。

翔太 雨降ると、よく明美さんから電話かか  
つてきて、洗濯物込んどいてくれ。鍵は  
小窓を開けたところにあるからって。(一  
ジャネットに)明美さんて、この人の元  
奥さん。年上で、きつい人でねえ。  
翔太 余計な事言うんじゃないやねえよ。それに今  
でも奥さんだ。  
順一 だってもう二年以上姿見てませんよ。  
翔太 家庭の事情ってやつだよ。そんなこと  
より、これ訳せ。此奴が訳すの信用でき  
ねえ。  
ジャネット 疑り深いね、この人。妹、認めてく  
れないよ。  
順一 (絵葉書を取り)英語ですか。  
翔太 大学行ってんだろ。  
順一 僕、法科だから。  
翔太 ああ、ほうか。って俺が受け狙わ  
なきゃいけないんだよ。  
順一 そうだ。あの子、英文科だから。(壁  
の向こうを顎でしゃくる)。

翔太 金髪が？

順一 今日の日は黒です。

翔太 メッシュ入ってんのもいたな。あれ、

年上もいいところだろ。相当な悪だよ。

このすけこまし。

ジャネ すけこやし？

翔太 こやしじゃなくて、こまし。ジゴロな

んだよ、此奴。女に貢がせてんだ。入れ

替わり立ち代わり、チビ、デブ、ノッポ。

順一 ほっといて下さい。（隣の部屋へ）小

百合。小百合。

（順一の愛人小百合、ネグリジェ姿でや

つてくる。眼鏡をかけた、小柄でブスな

女子大生）

小百合 順ちゃん、何。

順一 小百合、これ読んでくれる。

翔太 小百合って顔かよ。鬼百合みてえな顔

しやがって。

順一 訳して欲しいんだって。

小百合 ふーん。

順一 小百合、英語ペラペラだもんね。航空

会社受けるんだよね。

翔太 嘘。スチュアデスですか？

小百合 内勤です。

翔太 だよねえ。好かった。航空会社の株暴

落するところだったよ。

小百合 訳しますね。「親愛なる、マリ―へ」

ジャネ マリ―、私のママね。

小百合 「この間は楽しかったです。ヒルト

ンでの食事、舌鼓を打ちました。次回は

エルミタ・デル・ピラール通りで楽しみ

ましょう」。此処って、マニラーの歓楽街

ですよ。

ジャネ 知てるね。

順一 旅行好きだから、彼女。

小百合 「いや、その前にS・Mでの楽しい時

間を持つべきかな」

翔太 S・Mだ。親父そんな趣味があったの

かよ。

小百合 シュー・マー・ト・メガ・モールの略。

フイリッピンの有名なデパートですよ。

翔太 一瞬、パンツ一丁で鞭うたれている親

父の姿が浮かんだよ。

小百合 「なんでも望みを叶えてやるよ。ああ、

君のためなら、家族も捨てたいくらいだ」

翔太 勝手に捨てるな、エロ親父！

小百合 「もう一度、いや何度でも、君と二

人だけの暑い夜を過ごしてみたい。アジ

アの果てより愛を込めて、親愛なるマリ

ーへ。ヤマカンより」。

翔太 何がアジアの果てよりだ。親父のはて

みてえな顔しやがって。禿でメタボで、

出ッ歯だよ、俺の親父は。

小百合 恋は、すべての人を詩人にしますか

ら。

翔太 よし。二人が付き合っていたことは認

めるとしよう。だけど、本当に二人の間

の子かどうか・・・。

順一 ジャネット、妹に間違いないですよ。  
翔太 気安く言うな。  
小百合 顎の張り具合とか、目元の感じとか似てるような気がしますが。  
二人 だよ。ね。  
翔太 他人事だと思って、このオ。  
小百合 こんな時って、血液検査するんじゃないか。  
ありませぬ。  
順一 山本さん、何型？  
翔太 新潟。  
二人 えッ。  
翔太 新潟生まれの宇都宮育ち。由緒正しき0型よ。  
ジャネット 私も0型ね。日本来的时候調べたよ。  
二人 オ！  
翔太 声揃えんなって言うの。  
ジャネット 間違いないね。ヤクよ。マイブラザ  
翔太 寄るな。離れる。  
順一 あっさり認めちゃったら。

翔太 もう好い。さっさと帰れ。用事は済ん

だ。帰れよ。

順一 勝手なんだから。

小百合 それなら順ちゃん。さっきの続き。

順一 まだすんの？

小百合 途中下車は嫌。終着駅まで連れてつ

て。

順一 ジャネットのこと気になるじゃない。

翔太 行かないと、金髪やメッシュのこと。

・ ・ ・

小百合 何、それ？

順一 行きます。行きますよ。ジャネット。

じゃねっとなんちゃって。(小百合を促

して去る)。

翔太 何がじゃねっただ。色事師が。

ジャネ あの人、いい人よ。マブーテインタ

オよ。

翔太 あッ。

ジャネ どした？

翔太 恒子叔母ちゃんだ。叔母ちゃんなら、

親父のこと・・・。（電話を取ってプッシュする）。

（発信音。下手前面にスポット。恒子が受話器を持って現れる）

恒子 はい、はい。

翔太 あ、叔母ちゃん。俺、翔太。

恒子 あんれ、珍しい。元気でやってペが。

翔太 元気。元気。

恒子 盆にも正月にも帰ってこねえから、ど

うしたんだべがと心配してたんだ。相談もしてえこともあったし。

翔太 相談？

恒子 おめえん家の墓の囲いが崩れちまっ

てよ。

翔太 墓の囲い。

恒子 覚えてっぺ。大谷石で出来てるやつ。

翔太 そうか。いや、一度顔見せてえとは思

ってんだけど、何しろ貧乏暇なしで。

恒子 またそんなこと言っ。お馬の方が忙  
しいんじゃないがっぺが？

翔太 いやア、競馬は止めたよ。

恒子 ほんとだっぺが。

翔太 嘘じゃねえよ。心機一転個人タクシー  
やってみっかと思っ。目下勉強中だ。

恒子 そりや、見上げたもんだ。そしたら、

明美さんも戻っ。くっぺ。

翔太 そこんとは、どうも・・・。

恒子 連絡、あっだが？

翔太 どこへ消えたんだか。まったくの雲が

くれよ。あッ、そうだ。叔母ちゃんの方

こそ横浜へ出てきなよ。そんな時ヤ、八景

島パラダイスのイルカショー案内すっか

らよ。

恒子 そりや、楽しみだ。

翔太 墓の話はその時すっぺ。そんなじゃ。へ

受話器を置く。

ジャネ どう言っ？

翔太 あッ。(慌てて掛け直す)。叔母ちゃん  
20

叔母ちゃん。叔母ちゃん、兄妹の中で一番親父と仲良かったっぺ。聞きてえことがあんだ。知ってpeg。親父がマニラで子供こしらえたって言う話。

恒子　　そういや、ほかの奴には内緒だけどつて、そんなこと言ってたことがあったな。

翔太　　何、あるウ。で、いつ頃の話だ。

恒子　　死ぬちよつと前の、景気のいい時だ。

翔太　　（ジャネットに）お前幾つだ？

ジャネ　　二十三よ。

翔太　　親父の死んだのが・・・。（指を繰ってみて）合っちゃったよ。

ジャネ　　お前、やはり。兄貴よ。マイ・ブラザーよ。クヤ。クヤ。（顔を輝かせて、翔太にじり寄る）

恒子　　翔太。翔太。

翔太　　（受話器を握りしめながら、後ずさる）

（壁越しにポリュームいっぱいのマイケル・ジャクソンの曲。紗幕が降りて来る

第二場

寸劇入りコーラスとダンス)

♪ 俺たちタクシー・ドライバー

中華街から乗り込むマダム

すでに呂律が回らない

「ねえ、新年号なんていつかなれるも

んね。ウイー」

「平成と発表されたときは、へい、せ

いですか。なんて思ってたけどね」

「今じゃ、すらすら出てくるから不思議

議よね。うッ」

「どうしました？」

「駄目。駄目よ。オエー」

「ああやっちゃたよ、もう」

♪ ああ、白いシートにフカヒレが

でも、この仕事は止められない

俺たち浜のドライバー

（紗幕が上がる）、元の翔太のアップ。洗濯機の音。これからの小場面は、無言劇を基本とし、時にセリフが入る。必要な部分だけ明かりを当て、スピーディに展開する。軽快な音楽、ストロボを用いてもよい。半月後）

ジャネ（洗濯機から洗濯物を出し、ベラダへ運ぶ）。

翔太（万年床で高敷）。

ジャネ（起こそうとする）。

翔太（なかなか起きない）。

ジャネ（弾みをつけて尻から落ちる）。

勝田 ギャオー！（飛び起きる）。

### 第三場

（煮物の音）

第四場

ジャネ（煮物をしている）。

翔太（傍から覗き込む）。

ジャネ（料理をつまんで、翔太の口へ）。

翔太（美味え！）。

ジャネ（どんなもんだ）。

（部屋から菊枝が買い物袋をぶら下げて出て来る。小窓からジャネットに、留守を頼むと合図。階段口へと去る）

翔太（冷蔵庫を開けて、缶ビールを飲もうとする）。

ジャネ（取り上げ、壁の標語を指す）。

翔太（ポケットから百円玉を出して渡す）。

ジャネ（貯金箱に入れ、ビールを冷蔵庫へ）。

翔太（がつくり）。

ジヤネ（テーブルで居眠り）。

翔太（小机に向かつて、ねじり鉢巻きで受験勉強。ややあつて、小引き出しから通帳を出して、にんまり）。

ジヤネ（目覚めて、翔太の背後に回り、覗こうとする）。

翔太（慌てて隠す）。

ジヤネ（奪い取って逃げる）。

翔太（追い回す）。

（二人、「キャツキヤ、キャツキヤ」奪いつ奪われつする。階段から明日香が来る。バーの、マダム。和服にメッシュ入りの髪。順一の部屋のドアを何度も叩く。応答なし。不満で、ドアを激しく蹴って去る。入れ違いに茂夫が来る。勢いよくドアを開けると、ジヤネットが翔太に馬乗りになって、通帳を奪っているところ。三人、目が合い、びっくり）。

（紗幕が降り、寸劇入りコーラスとダンス）

♪ 俺たちタクシー・ドライバー

外人墓地を右手に走りや  
フェリス、共立、花の園

「女子大の先生ですか。好いな。毎

日ピチピチの女子大生相手なんて」

「ところが君、最近の女子大生は、学

問なんかそっちのけさ。授業中にはお

しゃべりをする。化粧はする、携帯は

鳴らす。自由気ままな運転手さんが羨

ましいよ」

「とんでもない。昔は勝手に車とめて

眠ることも出来たんですが、今じゃ無

線が煩くってね」

「お互い大変だねえ」

♪ 偶にヤお客と慰め合い

でも、この仕事は止められない

俺たち浜のドライバー。

第五場

（紗幕が上がると、蟬の声。二月後。万年床は片付けられ、銀杏の葉の青さが増す。テーブルで翔太が赤鉛筆を持ち、ねじり鉢巻きで問題集に取り組んでいる）

翔太

保土ヶ谷区権太坂上を戸塚方面から上り、左折して左側に見える公共の建物は何ですかと。ええと、戸塚方面からだろう。こう上って左といや、境木中学校。その先が境木地蔵で、そこを前進すると東戸塚の駅の方に出るんだ。簡単、簡単。よし、次は戸塚区に移るか。

（茂夫と幸三が来る。幸三は初老の男で、元大学の教授。二人とも翔太の運転手仲間。茂夫は手に缶ビールのパックを持つている。先に入る）

茂夫 いた、いた。暑いねえ、どうも。

翔太 シゲか。何だ、今日は。

茂夫 嫌だな。日曜日だよ。桜木町にきまつ

てんじゃないすか。

翔太 場外馬券場か。止せ、よせ。儲からね

えよ。

茂夫 へへん。(パックを掲げ)最終レース、

3・6でバッチシ。暑中見舞いでーす。

冷蔵庫入れときますよ。

翔太 有難う。もう一問やっちゃうから。

茂夫 (問題集を覗き込んで)兄貴に個人タ

クシーの試験受かりますかねえ。おっと、

それ、戸塚警察署。

翔太 煩せえな。

茂夫 変われば変わるもんだね。以前は府中

で大穴狙いの常連さんが、今じゃ個人タ

クシー狙って猛勉強ってたんだから。明美

さんに見せたかったね、この姿。

翔太 煩いんだよ。

茂夫 相変わらず連絡なし？

翔太 北海道で見かけたっていう話はあったけどな。ああ、煩せえ。煩せえ。止めだ、止めだ、こんなもの。（問題集と赤鉛筆を放る）。

茂夫 よくどやされたけど、いないとなると、寂しいもんだ。

幸三 （ドアから首を出す）あ、う、入ってもよろしいでしょうか。

茂夫 何だ、教授も来てたんか。

茂夫 ウロウロしてたから、拾って来た。

幸三 前に確か一度伺ったはずなんですけど、あの時は酔っていて・・・。タクシーの運転手が道に迷っちゃいけませんね。

翔太 入れ。入れ。

茂夫 あん時ヤ酷かったね。私は誘われたんです。畏に嵌められたんですって、おいおい泣きじゃくってさ。

翔太 ははは、例の女子大生淫行事件な。

幸三 とんだ醜態をお見せしちゃまって・・・

でも、何度も言うようですが、あれは向こうから誘いをかけて来たんですから。茂夫でも、スカートの中に手エ突っ込もうとしたのは事実なんだろう。幸三　　まア、そう言われると・・・。単位不足の女子学生だったんですよ。先生のためなら、何でもするって。こうスカートを出してやったら、即訴えるなんて・・・。私にはわかりません。最近の女の子の気持ち持たが。翔太　　それで大学教授の職失って、タクシートの運ちゃんじゃ、奥さんも泣くわな。幸三　　妻とは先月正式に離婚しました。翔太　　こりゃ、大変だ。茂夫　　（奥の部屋を覗き）ジャネットは？翔太　　買い物。幸三　　実はその妹さんのことで、本日は。マニラに知人がいると申したら、念のため調べてくれて確か・・・。

翔太 おお。それで？

幸三 間違いないようですね。妹さんの住んでたあたりを聞きまわったそうですが、確かに母親は日本人と交際していたようです。

茂夫 ほら、見ろ。間違いないって。

翔太 念のためだよ。

（ト突然「ヘルプ・ミー」というジャンネットの声。ややあつて、買い物袋を抱えたジャンネットが、階段を上がって来る。後を追って松次郎。松次郎は八十過ぎの老人。目が常軌を逸している）

ジャンネ ドント・タッチ、ミー。（部屋を通り抜け、ベランダへ。サッシを閉める）

松次郎 マリア。マリア。（土足で上がり込む）

む）。

翔太 いつも公園にいる爺さんじゃねえか。

茂夫 土足だよ。土足。

松次郎（構わうず、サツシを開けようとす  
る）マリア。マリア。おいのマリア。  
ジャネ ノー。私、マリアない。ジャネット  
・シヨウコよ。  
松次郎 おいじゃ。おいじゃ。  
翔太 おい、おい。どうなっただ。  
松次郎 小山内二等兵じゃ。松次郎しやんば、  
忘れたとね。ガバンのマーケットで知り  
合うた小山内二等兵じゃ。  
ジャネ ガバン知てる。フィリピンの町よ。  
でも、アイ・ドント・ノー。お前知らな  
い。小山内、おさないて、お前爺よ。  
幼くないよ。  
松次郎 愛し合うたやなかね。カンコン川の  
ほとりて、よう肩寄せおうて話合うたや  
なかね。おいを恨むは仕方なか。急な転  
身命令の下ったとよ。それで連絡取れな  
かったとよ。謝る。そやけん、ここ開け  
て。（ガタガタとサツシを鳴らす）。

ジャネ 兄貴、助けてよ。

（菊枝が、息を切らして飛び込んで来る）

菊枝 松次郎さん。人違いだよ。人違い。

翔太 向かいの小母ちゃん！

菊枝 この人を落ち着かせなくっちゃ。翔太

さんお願いだよ。

翔太 おお。シゲ、教授。

二人 分かった。

（二人は、抗う松次郎をサッシからはがす。翔太は洋服ダンスを開け、ネクタイを結んで紐にして二人に渡す。二人、椅子に松次郎を縛りつける）

松次郎 何すつと。敵兵の来襲たい。マリア、

助けんね。（椅子をガタガタさせる）

菊枝 （背をさすりながら）松次郎さん。気

を落ち着けるんだよ。向こうにいる人は、マリアさんじゃないよ。ようく見てごら

ん。ジャネット。こっちへ来てよく顔を  
見せてやっておくれよ。

ジャネ（イヤイヤ）

翔太 大丈夫だよ。もう動けやしねえから。

ジャネ（恐る恐るサッシを開けて出てくる）

菊枝 よっく見てごらん。同じフリッピン

の娘さんだが、この人はジャネット。そ

れにマリアが生きていたら、今幾つにな

ると思ってるんだい。見間違えたたい。

松次郎 七十・・。うん。見間違えたたい。

菊枝 落ち着いたかい？

松次郎 こりゃ、すまんこつを。

翔太 びっくりしたぜまったく。

菊枝 ジャネット、災難だったね。御免よ。

松次郎さん、時々こうなるんだよ。興奮

すると、手に負えないんだ。この人、昔

兵隊さんとしてフリッピンにいたらしい

んだよ。その時向こうの娘と懇ろになっ

て、その人の名がマリア。今でも忘れら

れないって、よく公園のベンチで話して

いたよ。それが今日偶々ジャネットが公  
園通りかかったもんだから、興奮しちま  
って・・・。

幸三 南方のローマンズってやつですか。

茂夫 九州の人？

菊枝 年取ったからって、息子さんのところ  
に引き取られて来たんだって。あらあら、  
土足のままで。〔靴を脱がせながら〕人  
目忍んで、子供までできたそうだ。

幸三 JFCの第一グループってやつですね。

翔太 JFC？

幸三 ジャパニーズ・フィリッピンズ・チ  
ュードレン。日本人とフィリッピン人の  
間に生まれた子供です。最近ジャッピ  
ーなんて呼び方もするらしいですがね。

幸三 戦前日本はフィリッピンを占領してい  
ました。そこには兵士や軍属と呼ばれる  
人々や商社の社員たちがたくさんいたわ  
けです。そこで現地の娘さんとのラブ・

ロマンスが花開いて・・・。

茂夫 第一グループってことは、第二もある

ってこと？

幸三 妹さんのケースがそうですね。バブル

の頃、日本の企業戦士と言われた人々が、

フィリッピン各地に経済的進出をもくろ

みしました。その時も、現地の女性たちと

沢山のロマンスが・・・。生まれた子供

は、一万人は下らないといわれています。

いや、もっといるかも知れません。

翔太 一万人かよ。

ジャネ 小学校のクラスに、何人もいたよ、

日本人父親の子。

幸三 私も翔太さんからの依頼があった時、

正確なところを知りたいと思っていましたね、

外務省に問い合わせてみたんですよ。と

ころが、そういう調査は一切したことが

ないんだそうです。フィリッピン大使館

でも同じようなことを言っていました。

茂夫 ほったらかしかよ。

ジャネ イナイ言うてたよ。やりばなしいけ  
ないて。

茂夫 母ちゃんがねえ。

翔太 え？

茂夫 うん？

翔太 何でフイリピンの言葉知ってんだよ。

茂夫 いや、何。兄貴は個人タクシーのお勉強

強。俺は、その、タガログ語のお勉強。

翔太 まさかおめえ、ジャネットに・・・。

茂夫 いえ、いえ。

ジャネ コミュニケーション大事ね。シゲ、

よく学ぶよ。

茂夫 そう、そう。コミュニケーションだよ

な、ジャネット。

翔太 (疑わしそうな目で見る)

ジャネ シゲ、フレンドよ。私、タイプ違う

よ。心配ないね。

茂夫 ええ！

菊枝 大丈夫かい、松次郎さん。縛られちゃ

って、まるで大泥棒みたいだね。これ、

解いて好いかい。

翔太 シゲ。

茂夫 あいよ。(松次郎を開放する)

菊枝 お暇しようか。家まで送って行くよ。

ジャネット。悪いけど、部屋拭いといて。

ジャネ OK。(松次郎を警戒しながら、雑

巾で、床と畳を拭く)

松次郎 ほんなこつ失礼をば致しました。(

敬礼する)

翔太・茂夫(つられて、敬礼)

菊枝 よつぽどフィリピンにいた頃が楽しか

ったんだね。最近は昔に戻る時間が以前

に増して来たような気がするよ。

ジャネ ローラ、バハイ。

茂夫 ローラは、タガログ語で、お婆さんの

意味。

菊枝 好い響きだね。婆アと呼ばれるより、

よつぽど好い。ローラ、ローラ、ローラ。

ローラ、ローラ、ローラ。

（菊枝は歌いながら、松次郎を労わりながら去る）

翔太 歌、違ってやしねえか。

茂夫 まったく人騒がせな爺さんだぜ。

幸三 それじゃ、私もこれで・・・。

翔太 いいじゃん。今ジャネットに何か作ら

せるからよ。

茂夫 へへへ。ジャネット。リクエストだ。

カモテキュー。それから冷蔵庫にビール  
入れといたから。

ジャネ サンキュー。

茂夫 教授。カモテキュー知ってる。サツ

マイモに黒砂糖まぶしたやつ。

幸三 いえ。

茂夫 これがいけるのよ。な、ジャネット。

翔太 ちよつと待った。気に食わないね。そ  
れ、何時食ったんだよ。俺、まだ食って  
ねえんだけどな。

茂夫 ゲエ。

ジヤネ この前来たね。お腹すいた言うから、

作て上げたよ。

翔太 俺の留守に？

ジヤネ 怒ることないね。兄弟の友達、皆友

達ね。

茂夫 皆で広げよう、友達の輪ってね。

翔太 (睨み付けて) 手エ出すなよ。

茂夫 大丈夫だよ。タイプじゃねえもんな、

俺。

ジヤネ イツツ・ライト。

茂夫 (がつくりする)

ジヤネ (冷蔵庫から缶ビールを出し) 貰た

ビールよ。兄貴、飲んでいいよ。乾杯。

一同 乾杯！

(一同、飲み始める。信一郎がやって来

る。菊枝の部屋のドアを開けようとする

が開かない。何度か試して、翔太の部屋

へ回る)

信一郎 あのうち、向かいの野口、留守でしょ

うか。

翔太 婆さんかい。今変な爺さん家まで届け

に行つた。すぐ戻るだろう。どうだい、

一杯。始めたところなんだ。

信一郎 有難うございます。ちよつと急ぎま

すもんで。申し訳ございませんが、これ

をお渡し願いますでしょうか。（封筒を

出す）。

翔太 会つてかないの？

信一郎 会えば、また愚痴が始まりますし。

翔太 ジャネット。

ジャネット（封筒を受け取る）。

信一郎 それでは、宜しく。失礼します（去

る）。

茂夫 誰？

翔太 婆さんの息子。

ジャネット（封筒の中を覗いて）お金、入つて

るよ。

翔太 今月分の生活費だろ。

幸三 訳ありですか？

翔太 息子社宅住まいなんだって。嫁さんと

仲悪くって、婆さん、孫娘の受験を口実

に部屋明け渡せって、放り出されたらし

いや。

ジャネ 日本人、親捨てるか。私たち、貧し

くても家族大切にするよ。家族のため、

外国人相手に新聞売るね。ホテルのボー

イもやるね。どうにもならない時、女の

子、体売るよ。男、力ついたら、家族の

ためトライクの運転手ね。日本人豊か、

でも、心貧しいよ。

翔太 トライク？

幸三 三輪自転車のタクシーですよ。確かに

最近の若い者は、心が荒れてきましたね。

倫理観といたったものがまるでない。

茂夫 何言ってるんだよ、女子大生のアそこ触

ろうとした奴が。

幸三 そう言われると、汗顔の至りなんです

が・・・。

三人（軽く笑う）

（明日香が来る。順一の部屋をノック。不在を確かめてから、こちらに来る。和服姿。スーツカバーを提げている）

明日香 順ちゃん知らない？

翔太 おお、ママか。

ज्याネ 今日学校ね。

明日香 ふーん。偶には行くんだ。すまないけど、これ、渡しといて。

翔太 プレゼントか。

明日香 就職活動始めるのにスーツがないって電話で泣きついてきたの。家に来ればいいのに、届けといてくれて。何考えでんだか、こんなところとご無沙汰で。

翔太 若い燕持つと、気もめるね。

明日香 あの子、ほんと分かんない。何もこんななぼろアパートに引っ越すことないの。私のマンションにあのままいりゃあ

よかったのよ。ねえ、聞いて好い。あの  
子、彼女でも出来たんじゃない？

翔太　（とぼけて）さてねえ。

明日香　知らない？

ジャネ　アイ・ドント・ノー。

明日香　この頃約束すっぽかすのよ。

ジャネ　忙しいね、きつと。

翔太　それよりどうだい、一杯。

明日香　お店開けなきゃなんないから。偶に

はお店の方に来てくださいよ。

翔太　駄目、駄目。ママさんとこの酒が飲め

るような身分じゃないよ。

明日香　順ちゃんが世話になってるんだから、

お安くしときますよ。それから伝言。今

度の金曜日、忘れるなって。じゃ、お願

い。（一礼して去る）。

幸三　何者ですか？

翔太　伊勢佐木町のバーのマダム。

茂夫　隣の？（小指を立てる）。

翔太　今日は水曜日だろう。もう少しいさせ

たかったな。すると鉢合わせだよ。

ジャネ 人が悪いよ、兄貴。

翔太 女同士が髪振り乱しちやっつて、こういがみ合ったりしちやっつてさ。へへへ、いっつかバレルぜ。そんな時が楽しみだ。

幸三 お盛んなんですか？

翔太 多くの女に貢がせないと、生活が成り立たないんだとさ。曜日によつて、女の子のローションが決まってるんだよな、これが。月曜日が、チビブスの頭の黒い娘。そして金曜日が出張で、あのメツシュのマダムさ。

幸三 一日置きですな。

翔太 いくら若いからつて、毎日はないア。

三人 (どつと笑う)。

ジャネ スケベ。男集まると、すぐその話よ。  
幸三 (ビールを飲み干し) それじゃ、やは

り私は、これで・・・。

翔太 好いじゃん。好いじゃんよ。

幸三 実を言うと、私も山本さん同様ゆくゆくは個人タクシーをと思いきましてね。勉強始めたところなんです。お酒が入ると、机に向かうことが出来なくなりますから。確か最短距離は十年以上の無事故で、五年以上の経験。法令免除で、地理の試験を受けられるんですけどね。

翔太 法令免除ってのはありがたいけど、この地理というのが曲者でね。横浜なら好いよ。毎日走ってたんだから。ところが試験にや、横須賀、川崎、三浦半島まで含むと言っただから、参っちゃおうよ。

幸三 それじゃ。

翔太 待ちなよ。また道に迷うといけねえから、途中まで送るよ。

幸三 恐れ入ります。

翔太 それはこっちのセリフさ。調べてくれてありがとう。さ、行こうか。ついでにコンビニで乾きもの買ってくらア。

（翔太と幸三は出ていく。ジャネットは、料理の支度）

ジャネ 今日には黒砂糖なくて、サンアントウで作るよ。さパリした味するよ。これ、皮剥くよ。（サツマイモと俎板、包丁を茂夫の前に置く）

茂夫 お、俺が。

ジャネ 兄貴、よく手伝うよ。

茂夫 嘘。

ジャネ 嘘ないね。ニコニコして手伝うね。  
茂夫 （皮を剥きながら）あの兄貴がねえ。

そういや、この頃いやに明るくなったもんな。明美さんに逃げられた時は、目も当てられねえくれしよぼくれていたのに。美人の妹が出来たのが、よっぽど嬉しいんだな。

ジャネ 二か月前、此処来た時、追い出されるか思ったよ。でも、妹分かってから、兄貴やさしかたよ。嬉しかたな。

茂夫　ただよ、妹は遙か彼方の海を越えて俺  
に会いに来たんだ。純情なんだ。手エ出  
したら、承知しねえぞつてのがどうも・

ジャネ　純情？

茂夫　ピユアってこと。

ジャネ　・・・・・

茂夫　どしたい？

ジャネ　どうもないよ。は、はは。それに

私、美人ないよ。肌、日本人と比べると、  
ちよと黒い。

茂夫　美人だよ。キュートだよ。そんな美人  
と一度デートしてみたいなアなんちゃつ  
て。へへへ、兄貴は兄貴、妹は妹じゃね  
えか。実は競馬で当てたから、ジャズ・  
コンサートの券二枚買ってきちゃったん  
だけど。(ポケットから出して、ヒラヒ  
ラさせる)。

(翔太が戻って来る。スイとその券を奪

う)

茂夫 兄貴！

翔太 何だよ、この券は。おめえ、吉幾三のファンだったんじゃないのか。

ジャネ どうしんだよ。

翔太 盛りのついた犬置てきたことに気付いたの。おめえも一緒に教授送るんだ。(券を持ったまま出て行く)

茂夫 待ってくれよ。その券高ったんだから。(追いかける)。

(ジャネットは、茂夫のやりかけのサツマイモの皮を剥き始める。順一と恵が来る。恵は、金髪のデブ。袋を持っている)

恵 今日日はモリモリ食べてね。

茂夫 すき焼きなんか、久しぶりだよ。肉屋の娘と付き合ってたよ。

恵 司法試験の勉強頑張ってたよ。これ、買



第六場

「はい、どちらまで？」

「……」

「お婆アちゃん。どこへ行けばいい」

「此処はどこ？、私は誰？」

「ええ」

「あんた、息子じゃないね。車、いつ

ものじゃないみたい」

「ボケてんだア。大変、今交番に付け

るから」

♪ ああ、商売抜きで人助け

でも、この仕事は止められない

俺たち浜のドライバー

（アップ・テンポの曲で、紗幕があがる

と、ジャネットと順一が座敷で踊っている

る。順一は、スーツ姿。小机の上にC D

デッキ。テーブルの椅子に菊枝と松次郎。

カモテキューを頬張りながら見物している

る。前場から一月後。ややあつて、順一、  
豊の上にひっくり返る)

順一 駄目。もうこれ以上踊れません。ジャ

ネット、ビール。何か飲むもの。

菊枝・松次郎 (拍手)。

ジャネ (デッキを止めながら) 弱いね。そ

んなことで、よく女三人相手するよ。(缶  
ビールを持ってくる)。

順一 (一気に飲み) 今日三つも会社訪問  
したんだぜ。もう、くたくた。ああ、美

味い。

ジャネ (手を出す)。

順一 何?

ジャネ 三百二十円。

順一 金取んの。

ジャネ 兄貴、飲むの我慢してるよ。飲んだ  
つもりで貯金してるよ。だから、ただで

飲ませられないよ。

順一 しっかりしてるよ。はい、五百円。お

つり頂戴。

ジャネ おつりないよ。マイ度ありイ。(貯金箱に入れる)

順一 そりゃないよ。

菊枝 どうせ貢がせたお金だろう。ケチケチしなさんな。え、何なんだい。

松次郎 (耳打ちする)

菊枝 ジャネット踊りが上手いってかい。へえ、マリアさんも上手かったのかい。プロ

口のようだったさ。

ジャネ プロ・・。菊枝 どうかしたのかい？何か気に障ったか

ね。

ジャネ いや。(気を変えて)それより、カモテキューの味どうね。

菊枝 美味しい。美味しい。ねえ、松次郎さん。松次郎 懐かし美味たい。

菊枝 おや、この部屋に入って初めて口をきいたよ。

ジャネ マニラのおやつ。子供たち、皆好き

よ。

松次郎　　マリアも得意やったとたい。おいはあ  
の頃連隊の給与係での。

順一　　給料の計算やってたんだ。

松次郎　　違う。違う。食料の買い出し係たい。

兵隊にたらふく食わせよう思うて、毎日市場に出たもんじゃ。その市場で、店を出しておったのが、マリアたい。サトウキビ、バナナ、パイヤ、それによる名も知らんような果物並べてのう。目の大きな娘やった。ガバンいう町は、一万足らずの町やったが、スペインに占領されておったためか、教会やセントラル・パルクのある住みよい町やった。上官の目エ盗んでは、よう公園で逢引きしたもんたい。そんな時マリアはよくカモテキューーば作って持って来てくれたとよ。おいにとっては、カモテキューーは初恋の味やっただ。美味かいいうて褒めると、ぽーと恥じらいおって、その可愛らしかこと・・・

菊枝 今日はいつになく調子が好いようだね。

菊次郎 うまかカモテキューが、どんどん昔を思い出させるたい。

菊枝 順ちゃん、あんたも一つお上がりよ。

順一 僕甘いのが苦手な人だから。ああ、それにしてもやんなっちゃうな。夏も終わろう。

菊枝 就職かい？ 弁護士目指すんじゃないか。もの。

順一 遠い昔の夢。僕的能力じゃ・・・。

順一 バブルの時に生まれたかったな。

菊枝 女に食べさせて貰えば好いじゃないか。そのスーツ、ママさんの貢ぎ物なんだろ。

う。あの人ならお金もありそうだし、面倒見て貰えば好い。一緒にマンションに

住まわせて貰えば、家賃はただだよ。

順一 そのマンションから逃げ出して来たんですよ、僕は。

菊枝 おや、そうなのかい。

順一 ママの店で、バーテンダーのバイトや  
つてたの。気に入られて、学費払ってく  
れる約束でママと同棲。でも、夜がしつ  
こいんだよ。毎晩毎晩じゃ、いくら僕だ  
つて・・・。出来ることなら手を切りた  
いんだけど、一番お金持ってるあの人  
菊枝 聞いてみないと、分からないもんだね  
え、男と女の仲というのは。

松五郎 女子に養われるとは、日本男子の風  
上にも置けん奴たい。

順一 へん、爺さんには言われたくないね。

松五郎 爺さんだって、マリアと遊んだん  
だろ。

松五郎 何ばいうか。おいは真剣やったと  
た  
い。結婚するつもりやっただとたい。

菊枝 ままならない戦況になっただとたい  
だよね。

松五郎 日本軍は、始めフィリピンでは解放  
軍と思われて、歓迎されとったとたい。

ところがアメリカ軍の上陸すると、戦況は一変。窮地に追い込まれた日本軍は、食料確保のため、フィリッピンの村々に火をつけて、略奪の限りを尽くすようになつた。たい。蛮行に継ぐ蛮行じゃ。マリアの住んどったガバンも、おいたちの後に入つた部隊によつて散々に焼き払われて。・・。

菊枝 マリアさん、その時に日本の兵隊に殺されちゃつたんだよね。

松次郎 マリアがおいの子オ身籠つてたことば知つたのは、戦後再びマニラを訪問した時やつた。子供に会いたか思うて探しても、最早手掛かりになるもんは。・・。

菊枝 松次郎さん。興奮しちゃいけないよ。

松次郎 また妄想の世界に入っちゃまうよ。

をば、遊びと思ふとる。女子に貢がせるなど、言語同断たい。

順一 分かった。分かったよ。だから就職し

たら、きっぱりやめて、結婚する。

ジャネ 金髪ね。黒。それともメッシュ？

順一 彼女らとはしない。就職先の社長の娘

を狙う。

菊枝 ドラえもんなんだねえ、最近の人は。

松五郎 (耳打ちする)

菊枝 ああ、ドライね。

順一 ああ、面倒くさい。いつそ山本さんの

ようにタクシ一の運転手になっちゃおう

かな。

菊枝 大学出てかい？

順一 タクシ一業界には色んな人がいるって

言ってたよ。元大学教授もいれば、ボク

シングの元日本チャンピオンもいるんだ

って。気楽そうじゃん。

菊枝 いずれ訳ありの連中さ。

ジャネ 私兄貴探すため、沢山タクシ一乗た

よ。運転手、色々気イ使って大変ね。

菊枝 試して上げようか。私も翔太さんから

色々聞いて知ってるよ。

ジャネ 目的地つくね。お客さん、酔て寝てるよ。声かけても起きないね。どうする、順。

順一 勿論優しく揺り起こしてやるさ。

二人 ブー。

順一 違うの？

ジャネ 交番行くね。

菊枝 体に触って、後で物がなくなっただけ

言われたら困るだろう。お客さんが女性だったら、セックス・ハレーションで訴えられるかも知れないよ。だからお巡りさんに起こして貰うの。

順一 それを言うなら、セクシャル・ハラス

メント。

ジャネ お客さん、ゲロ吐くね。その始末もドライバーね。順に出来る？

順一 やだなア。

菊枝 仕事は何でも苦勞の多いもんさ。気楽な仕事なんてありやアしない。

ジャネ 順にはジゴロびたりよ。(菊枝とともにもに笑う)

(この以前から菊枝の孫の晴美が来て、菊枝の部屋のドアを開けようとしている。高校生。スケッチブックを手にしている。笑い声に気づき、入って来る)

晴美 お婆アちゃん。

菊枝 晴美じゃないか。

晴美 (大声をあげて、泣き始める)

菊枝 どうしたんだよ。

晴美 お母さんが・・・お母さんが・・・。

菊枝 泣いていちゃ分からないじゃないか。

よし、よし。私ンとこ行こう。済まないが順ちゃん、松次郎さんを送ってくれないか。公園の前の八百屋の横に入ったところ。

ジャネ これ。(カモテキューを紙に包んでやる)。

菊枝 ジャネットだよ。このカモテキュー、最高に美味しいよ。貰って行こう。(行きかけて) そうだ。翔太さんに棚を吊つてくれるよう頼んでおいたんだ。これで材料揃えるように言つとくれ。(一万円札を出す)

ジャネ 大一枚お預かりイ。

菊枝・順 大一枚？

ジャネ (慌てて) ノー、ノー。何でもない。

一万円ね。

菊枝 さ、行こう。(晴美と去る)。

順 一 松次郎さんも行こうか。

ジャネ バーイ、松次郎。

松次郎 おお。マリア。

順 一 違う。違うって。さ、靴を履いて。行くよ。(背中を押して去る)。

ジャネ (見送って) まずいと言ってしまったよ。

(電話の着信音。ジャネットは、ポケット

トから携帯を出す)

ジャネ ミカエラね。電話大丈夫ね。(あた  
りを見回し) どうしたね。悲鳴するよ。  
誰、あんた誰よ。黒田。マネージャーの  
黒田ね。どこにいるか言え。言えないよ。  
ミカエラ打つのいけないよ。放して上げ  
て。お金？ 十分働いたね。借り返したよ。  
足らなくないよ。探す、要らないよ。止  
めて、ミカエラ、泣いているよ。ミカエ  
ラ！ ミカエラ！  
(翔太と茂夫が来る。茂夫は、足を引き  
ずり、顔や手に傷を負っている。二人と  
も、会社の制服)

翔太 ジャネット、救急箱だ。

ジャネ どしたね？

翔太 どうしたもこうしたも、他の会社の奴  
らに囲まれたっていうから、駆けつけて

見たら、このざまだ。

茂夫 すまねえ。

ジャネ (救急箱から薬品を出して、茂夫の

顔に塗る)。

茂夫 ウツ、滲みる。

翔太 何が滲みるだ。大変なことになるとこ

ろだったんだぞ。会社同士のいざこざに

なりかかったんだ。この、馬鹿が！(殴

ろうとする)。

ジャネ 止めて。暴力駄目よ。

茂夫 兄貴に殴られても仕方ねえんだ。俺が

悪いんだ。駅でお客を下して、そのまま

お客を乗せちゃったから。

ジャネ どういうことね。

翔太 順待ちしている車飛び越しちゃったん

だ。しかもうちの会社が駅待ち出来ねえ

エリアでしょう。

茂夫 お客がスイと乗り込んじまったから、

そのまま発車しちゃって・・・。

翔太 お客さん、あちらの車へってのが仁義

だろう。他社の奴らがおめえ追いかけて  
引きずり出すのも無理はねえや。それに  
おめえを引きずり出した奴、覚えてるか。  
このくそ暑いのに長袖のシャツ来てたろ  
う。何故だ？

茂夫 車の冷房が苦手だから。

翔太 違うよ。二の腕まで彫った入れ墨隠す  
ためさ。元組者だね、ありや。妙にこじ  
れたら、どんなことになるか。タクシー  
の運転手には、いろんな奴がいるんだと、  
いつも言ってるだろう。気をつけろい。

茂夫 うん。うん。

翔太 話は俺が付けてくる。ジャネット、後  
は頼んだぜ。一度ドアを出て、すぐ引  
き返す。ジャネットに手エ出すんじゃね  
えぞ。

茂夫 分かってるよ。

（翔太は、去る。ジャネットはシゲをに  
包帯を巻く）

茂夫 ジャネット。お前は本当に優しいな。

（手を握ろうとする）。

ジャネ （ピシヤリと傷口を叩く）。

茂夫 ギャオー。

ジャネ 兄貴に言いつけるよ。でも、今の兄

貴、かつこよかたな。私、ますます兄貴

大好きよ。

茂夫 ふんだ。同じようなこと言ったらア。

兄貴もジャネットが好きでたまらねえっ

てよ。

ジャネ ほんとね。

茂夫 目の玉に入れても痛くねえって。

ジャネ 何言てる。目の玉に人間入らないよ。

茂夫 例えだよ。例え。

ジャネ 私らマタンダング・カパテイドよ。

互いのこと、よく分かるよ。

茂夫 それ、兄妹ってことだろう。

ジャネ 勉強進んだね。

茂夫 それもジャネットとコミュニケーションショ

ンしてえげっかかりじゃねえか。いいか、  
秘密にすりゃ、いいじゃん。付き合っち  
やおうぜ。

ジヤネ ノー・サンキュー。

茂夫 付き合おう。(足を引きずりつつ迫り)

付き合おうよ。

ジヤネ 駄目よ。駄目。駄目。

(ジヤネットは接近してくる茂夫に、回  
りのものを投げて、防戦する。翔太の妻  
明美が、キャリーケースを引きずりなが  
らやって来る。ドアを開けた瞬間、ジャ  
ネットの投げたものが命中する)

明美 何すんのよ。

ジヤネ 誰、あんた？

明美 あんたこそ誰？

茂夫 明美さん！

(急激に紗幕がおりる)

第二幕

第一場

（紗幕の前で、寸劇入りコーラスとダンス）

♪ 俺たちタクシー・ドライバー

急げ急げとせかせるお客

試合開始が迫ってる

「野球観戦ですか。いいなア、こっち

はラジオで聞くばかりですよ」

「どっちが勝つと思う」

「大魔神佐々木ですからねえ、ジャイ

アンツなんかフオークで、一ひねりし

よう」

「馬鹿言うな。俺は巨人ファンだ。へ

なちよこフオークなど滅多打ちだ」

「ベースターズの勝ちですよ」

「何、運転手のくせに生意気言うな」

「くせとはなんですか」

♪ ああ、偶にヤお客と大喧嘩

でも、この仕事は止められない

俺たち浜のドライバー

（紗幕があがると、下手座敷に翔太と

明美。黙って睨みあっている。上手の部

屋にジャネット。椅子に座って背を向け

ている。ドアの外に、茂夫、幸三、菊枝、

松次郎、晴美が折り重なるようにして中

の様子を伺っている。マイケル・ジャク

ソンの曲が、壁の向こうから流れている）

菊枝 何時からだい？

茂夫 兄貴の夜勤明けからずっと。

幸三 シゲさん、今日勤務でしょう。

茂夫 これが放っておけるかよ。タクシー、

ア パーットの前に止めたまんま、駆けつけ

たんだ。そういう教授は？

幸三 非番だから、山本さんと一緒に勉強し

ようかと思つて。

晴美 ジャネット、どうかしたの？

菊枝 それが分からないんだよ。

茂夫 あ、何か始まったみたい。

明美 とにかく出てつて貰つて。此処は私の

家よ。

翔太 プイと居なくなつて、私の家もないも

んだ。

明美 出て行かせたのは、誰なんだい。給料

全部、お馬さんの飼料代にしちまったの

は、どこの誰なんだよ。ちやんとお金入

れていてくれたら、とつくに気の利いた

マシシヨンの一部屋ぐらい・・・。残つ

ているのは、二階の三軒だけのぼろアパ

ートに、いつまでも住んでるような生活

に、私は、疲れてしまったんだよ。

翔太 そりゃ、反省してるよ。だから今個人

タクシーの勉強してるところなんだ。好

いか、個人タクシーってのはよ、出勤は

月の半分しかダメってこともねえんだよ。

好きな時に休みも取れる。給料が稼ぎの

半分ということもねえんだ。働いた分だ

け、収入さ。そりゃ、整備や税金はこち

ら持ちだけどさ。もしお前が戻ってきた

ら、今度こそ美容院勤め止めさせてやろ

う。俺一本の収入で養ってやろうと思っ

てたんだよ。

明美　また口から出まかせ言っ。その手に

や乗らないね。どれだけ裏切られてきた

翔太　嘘じゃねえっ。これ、見てみる。試

験用の過去集だ。それから・・・。(

机の小引き出しから通帳を出す)

明美　(開いてみて)嘘。百万以上ある。あ

んた、悪いことしてないよね。

翔太　この二年間、生活費切り詰めて来たん

だ。朝勤務が終わると、仲間の洗車を何

台もやらせて貰った。一台やると、千円

貰えるんだ。コツコツ貯めて百万超えた

でも、これでも目標の半分だ。個人タク  
シーにはメーター表示機、自動ドアの設  
備と金がかかる。廃業する奴の車讓って  
もらったとしても、最低二百万は必要だ。  
どうだ、これで俺が立ち直ったことがわ  
かるだろう。

明美　でも、それとこれとは別だよ。

翔太　だからよ、俺の努力に免じてジャネッ  
トと一緒に住むことを・・・。

明美　いや、いや。たとえほんとの妹でも、  
色の黒い妹となんか住みたくない。恥ず  
かしくって、一緒に歩けやしない。

翔太　なんてことを言うんだ。それは、差別  
だぞ。

明美　差別かキャベツか知らないけど、私は  
絶対に認めないから。ええ、煩いねえ。

（過去問集を壁ぬ向かって投げつける）

（ぴたりと曲、止む）

翔太 恥ずかしいだと。俺の妹が恥ずかしい

だ。と。遙々海を越えてやってきたんだぞ。

兄貴を頼ってやってきたんだよ。可愛い

じゃねえか。それが分かんねえのかよ。

明美 何が遙々よ。飛行機で一ツとびじやな

いか。

翔太 馬鹿野郎！（ピシヤリと打つ）

明美 やったねえ。言葉で負けると、すぐ暴

力だ。（打ち返す）。

翔太 この野郎。

明美 負けるもんか。

（二人、組んずほぐれつの格闘。ジャ

ネットが、割って入る）

ジャネ 止めて、兄貴。

翔太 どけ。どくんだ。

ジャネ 駄目。暴力駄目よ。（絶叫して）暴

力止めてえ！

二人 （びっくりして）ジャネット！

（ドア前の一同が、中へ雪崩れ込む）

一同 ジヤネット i

ジヤネ 暴力怖い。もういらないうよ。（もの  
に憑かれたように、小刻みに震えだす）

茂夫 ジヤネット。大丈夫か。（抱きかけよ  
うとする）。

翔太 （手荒く押しつけ）ジヤネットには俺  
がついてるんだ。手エ出すんじゃねえ。

茂夫 兄貴！

翔太 ジヤネットは俺が守るんだ。俺が・・

・。（目が、異様に光っている）。

茂夫 兄貴・・。

ジヤネ 兄貴！暴力、いけないよ。

翔太 うん。うん。（しっかりと抱きしめる）。

明美 （冷ややかに二人を見つめる）。

（順一と恵が、部屋から来る）

順一 煩くて、気分乗らないんですけど。

恵 静かにしてくんない。

一同 (ジロリと二人を睨む)。

## 第二場

(軽快な音楽。座敷に洗濯物の山。それを挟んで、ジャネットと明美。一枚づつ取り出してはたたむ。テーブルに翔太問題に取り組み中。此処からの小場面は以前のごとく、無言劇風、スピーデイに)

明美 (ジャネットの派手な下着を取り出し、いやな顔。ジャネットに投げつける)。

ジャネ (朱美の下着を取り出し) ダサダサ。

(明美に投げつける)。

明美 (再びジャネットの下着を投げつける)。

ジャネ (同じく投げつける)。

(二人、次第に熱して、次から次へ投げ

つける。翔太は、勉強もままならず、立ち上がる。やがて二人は、翔太のトランクスに手をかけ、お互い引っ張り合う。トランクス、破れる。

三人（おお！）。

### 第三場

（物を炒める音。テーブルに翔太と明美。ジャネットが、料理を運ぶ）

明美（一口食べて、舌を出す。辛すぎをなじる）。

翔太（否定。美味いとお代わりを望む）。

明美（立ち上がり、ベランダへ。煙草に火をつけようとすると、空腹の虫。耐えられず、テーブルに戻りガツガツ食べる）。

ジャネット・翔太（笑う）

第四場

（信一郎が、廊下に押し出されて来る。  
中に入ろうとする、ドアの前に菊枝が  
仁王立ち）

信一郎 晴美・晴美。

晴美 （返事なし）。

菊枝 （出てけの指示）。

信一郎 （しおしおと去る）。

晴美 （ドアから出る）。

二人 （やったア。ハイタッチ）。

（順一と小百合が来る）

順一 （両手を合わせて、懇願）。

小百合 （しぶしぶ財布からお金を）。

順一 （小百合にキス）。

二一 （ルンルン気分、順一の部屋へ）。

第五場

（洗濯機の音。洗濯物を持ってジャンパ  
トが部屋から出る。Tシャツ。ジーパ  
ン姿。洗濯物を投げ入れた後、辺りを  
キョロキョロと見まわす。階段を翔太  
が登ってくる。ジャンネット、Tシャツ  
とジーパンを脱いで洗濯機に入れる。  
下着姿。翔太、出るに出られず見守る。  
ジャンネットは、ブラジャーも外して洗  
濯機へ入れ、部屋へ入る。翔太出て来  
て、自分の下半身を見て、びっくり。  
慌てて股間を押えて、階段を駆け下り。  
る。入れ違いに菊枝が登って来る）

菊枝

（小首を傾げる）。

第六場

（ベランダにジャンネット。ドアの前に明  
美。それぞれ携帯電話で話している）

ジャネ お金、払たよ。その分働いたよ。

明美 だから、終わったの。

ジャネ 利子？何、それ。知らないよ。借り

たお金、百万よ。利子、聞てないよ。

明美 くどいな。やり直しはきかないの。

ジャネ それ払う、もう探さない？

明美 女は一度決めたら動かないの。

ジャネ 届けるよ。探さないこと、確かね。

明美 じゃ、切るから。

ジャネ (電話を切り、座敷に戻り、暗然と

佇む)。

明美 (煙草を取り出し、一服する)。

ジャネ (ふと小机の引き出しに目が行き、

そっと開けてみる)。

明美 (入ろうとして、ジャネットの行動に

気付く)。

ジャネ (通帳を出し、じっと見る)。

明美 (ジャネットを伺う)。

第七場

(紗幕が降りて、寸劇入りのコーラスとダンス)

♪ 俺たちタクシー。ドライバー

いつも陽気を取り柄だが、

怒りに燃える時もある

「ほんと頭来ちやったわよ」

「よくあるんだよ、そのケース」

「小銭ないからって、コンビニへ入っ

て行ったのよ」

「違う入り口から消えちやったって奴

だらう。典型的な、踏み倒し」

「女だからって、馬鹿にしてんのかし

ら」

♪ ああ、客を待つ間の愚痴談義

でも、この仕事は止められない

俺たち浜のドライバー

（虫の声。遠く船の汽笛の音。夜。座敷に床を並べて翔太と明美。上手の部屋に、机を寄せてジャネットが寝ている。座敷に月の光。銀杏が色づいているのが見える。明美がモゾモゾと動き出し、翔太の床に潜り込もうとする。翔太、ゴロリと床の外に出る。明美、同じく出て、翔太に覆い被さる。翔太は突きのけ、這いながら逃げる。追う明美。翔太の足にしがみつく、ズルズルと翔太のパジャマのズボンが脱げる）

明美 （声を殺して）何でだよ。

翔太 （同じく）明日勤務だよ。

明美 そんなこと言ったことないじゃないか。

翔太 ジャネットがいるよ。

明美 空き部屋で眠らせれば好いんだよ。

翔太 どの部屋も、大家がガラクタ入れて、

倉庫代わりさ。（逃げ回る）。

明美 （追い疲れて）ああ、止めた。止めた

翔太 有難う。

明美 おかしいよ。何でもジャネットだ。

翔太 離れたた妹が訪ねて来たんだ。当たり前

めえだろ。

明美 おかしい。まるで恋人扱いだ。あんた、

ジャネットに惚れてないかい。

翔太 馬鹿言うな！（思わず大声を出し、慌

てて口を押える）。

明美 女の直感さ。分かるんだ。あんたは、

ジャネットを女として見てる。

翔太 あったまるか。

明美 なら、どうしてシゲが交際したかって

いうのを許さないのさ。好い奴じゃない

か。

翔太 彼奴は競馬狂だ。

明美 あんたほどじゃないさ。それにこの前

の、あれは何さ。ジャネットがパニック

起こした時、シゲが介抱しようとしたら、

突き飛ばして離れたろう。あん時の目、

他のオスにメスを取られたくないオスの

目だった。ジャネットを女として見てる  
何よりの証拠さ。自覚がないだけなんだ  
よ。

翔太 ジヤネットは、妹だよ。

明美 なら、抱いてよ。前は私が疲れてるか  
らと言ったも、無理やり押し倒したじゃ  
ないか。その人が、戻ってから一度だつ  
て抱かないなんておかしいよ。ジャネッ  
トに私ら夫婦だつてこと、改めて見せつ  
けてやるんだ。さ、抱いて。抱いてよ。  
（パジヤマのボタンをはずしにかかると

明美 ふん。凶星じゃないか。惚れた女に痴

態は見せられないか。

翔太 そんなこと・・・。

明美 何だい、いつも二人でべたべたと・  
・。こうなったら私、意地でも別れない  
からね。

翔太 別れるなんて言っただろ。

明美 それにあの娘、気をつけないと。

翔太 何だと。

明美 せっかくの虎の子盗まれるかもしれないな

いな。隠す場所変えたら。いや、もしか

したら、もう。

翔太 冗談だろ。(引き出しから通帳を出す)

ほら。

明美 残高は？

翔太 (月明かりに翳して) 間違いなえよ。

ジャネットはそんな女じゃねえよ。

明美 とち狂ったあんたにや見えないだけだ

よ。あの娘には裏があるね。

翔太 いい加減なこと言うな。

明美 極楽とんぼだよ、あんたは。ああ、ム

シヤクシヤする。(出て行こうとする)。

翔太 夜更けにどこ行くんだよ。

明美 出て行ったら、嬉しいかい。残念だね。

無駄に火照った肌を風になぶらせて来

るだけさ。私は、二度と家出なんかする

もんか。此処が私の居場所だと思っただか

ら、帰って来たんだ。誰にもあんたを私

はしない。(ジャネットに一瞥を繰れ、  
出て行く)。

翔太　おい。

(翔太はドアまで追いかけるが、すぐに諦める。ジャネットが寝返りを打ち、腕が布団の端からニョキリと出る。翔太は、それを戻そうとして、思わず腕に頬擦りする。ハッとして)

翔太

まさか。まさか俺って・・・。そんな。そんな・・・。(後ずさりして、ドアから飛び出して行く)。

(虫の声。汽笛の音。酒に酔った明日香が、寿司折をぶら下げてやって来る。手荒く順一の部屋のドアを叩く)

明日香　順一。こちら順一。ここ開ける。また

約束破りやがったな。昨夜は白々明けま

で待ってたんだぞ。(戦法を変えて)ふ  
ふん。順ちゃん。開けてよ。焦らさない  
の。ほら、あなたの好きな、鯉寿司の折  
持って来たわよ。二人で食べよう。(返  
事がないので、前より激しく)こら、順  
一。てめえ、女引っ張り込んでいるんじ  
やねえだろうな。出てこい。出て来ねえ  
か。順一。

(菊枝と晴美が顔を出す)

菊枝 ちよいと、安眠妨害だね。

明日香 ドア、開けないんだよ。

菊枝 追えば追うほど、男ってものは逃げて

くものさ。

明日香 へん。男と女のことについて、婆さ

んにとやかくいわれたくないね。

菊枝 男の数はこなしてますって言う言い草

だね。

明日香 何だった。

菊枝　　ご馳走様。  
明日香　　勝手に食いやがれ。馬鹿野郎。  
菊枝　　おや、私へのプレゼントかい。  
明日香　　ええ、こんな物。(菊枝に投げつける)  
明日香　　明日学校があるんだよ。帰っておくれ。  
菊枝　　知るもんかね。迷惑なんだよ。この娘、  
明日香　　まさか女友達じゃないだろね。  
菊枝　　私や、順ちゃんの子守じゃないんだよ。  
菊枝　　友達の家で、レポート書くんだとか言っ  
明日香　　てたよ。  
菊枝　　言つとくけどね。順ちゃんはいないよ。  
明日香　　煩せえ。糞婆ア。  
菊枝　　おばさんの間違いじゃないのかい。  
菊枝　　は、あの子のあしながお姉さんなんだか  
助なくしてはやってっぺいけな。私  
男女の仲と違うのさ。あの子は、私の援  
明日香　　順一と私の仲は、そんじよそらの  
菊枝　　悪女の深情けつてのは、迷惑なもんさ。

明日香　いけ好かない婆アだね、まったく。

（ふらふらとした足取りで去る）。

晴美　あの人は？

菊枝　順ちゃん、若い燕なんだって。

晴美　何、それ。

菊枝　さ、眠った。眠った。明日学校だろう。

（部屋に入る）。

（紗幕が降り、寸劇入りのコーラスとダンス）

♪　俺たちタクシー・ドライバー

伊勢佐木町で拾った客は

「奥さん、東戸塚着きましたよ」

「ムニヤムニヤ。えッ、東戸塚！いけ

ない。私先週引越したのよ。至急大

宮へ回して」

「万札飛びますけど」

「今日中に帰らないと、亭主に浮気ば

れちやうかも」

♪ ああたまの長距離たまらない

おこの仕事は止められない

俺たち浜のドライブ

## 第八場

（数日後。テーブルにジャネットと茂夫）

茂夫 それじゃ何か。妙に余所余所しいって

ついうのか。

ジュネ おかしいよ。

茂夫 何か明美さんに言われたんだな。仲よ

すぎるから、ジラシーか。

ジュネ 兄妹、中好いの当たり前よ。

茂夫 と言つても、あまり見せつられると、

俺だつて・・・。

ジュネ 分かんないよ。

茂夫 明美さんは？

ジャネ 仕事決まて、働き行たよ。

茂夫 前いた店か。

ジヤネ 伊勢佐木町、パーマお店ね。

茂夫 好い技術持ってたんだろな、即採用なんて。

ジヤネ 私も髪いじる、好きよ。

茂夫 いっそ弟子入りしちゃえば。

ジヤネ 弟子入り？

茂夫 俺がジヤネットにタガログ語習ったよ  
うに、髪いじるの習うの。

ジヤネ お姉さん、マルピトよ。

茂夫 冷てえか。肌が合わねえんだろな。

ジヤネ 肌黒いから？

茂夫 そうじゃなくて、ピピピッて感じ合う  
ものがねえんだな。

ジヤネ 兄貴とはピピピッよ。

茂夫 な、こんな家つまらなくねえか。どう  
だ、俺と同棲しねえか。

ジヤネ どうせい言うの？

茂夫 一緒に住むの。

ジヤネ またその話。シゲ、タイプ違うよ。

茂夫 じゃ、どんなタイプが……って、

聞くまでもねえか。でも、兄妹じゃ無理

だぜ。

ジャネ分かれてるよ、そんなこと。分かれてる

けど・・・。

（菊枝の部屋で、晴美の「嫌だ。嫌だ」

の声。ややあつて、ドアを開けて晴美が

飛び込んで来る）

晴美 ジャネット。助けて！

ジャネ どうしたね。

晴美 お父さんが・・・。

（信一郎が、晴美のカバンやスケッチ

ブックを持って、乗り込んで来る。後に

続いて菊枝。あとから松次郎と翔太が出

て来て、廊下で中の様子を伺う）

信一郎 晴美。さ、帰るんだ。

晴美 帰りたくない。お婆ちゃんと一緒に暮

らす。

信一郎 今が一番大切な時じゃないか。お母

さんが心配してる。

晴美 お母さんの顔なんか見たくない。

信一郎 馬鹿言うんじゃない。家出なんて普

通の娘のすることじゃない。

晴美 不良で好いもん。ヤンキーになってや

る。

信一郎 塾の先生も休みが多いつて心配して

たぞ。

晴美 お母さんも塾の先生も、成績さえ良け

れば、満足なんだ。私の満足なんて考え

てくれない。

信一郎 何が不満なんだ。お父さんたち、出

来ることほしてるじゃないか。勉強部屋

が欲しいというから、お婆ちゃんに部屋

を開けて貰ったじゃないか。評判の塾に

も通わせている。

晴美 お父さん、何も分かっていない。私、

勉強部屋が欲しいなんて言っていない。お

婆ちゃん、私のこと映画に連れてったり、お芝居に連れてったりするのが嫌だから、お母さんがそう言って、お婆ちゃんを追いかけたんだ。い出したんだ。信一郎、そんなことはない。菊枝、いや、ほんとだよ。私も顔合わせているのが鬱陶しいから、これ幸いと出てきちゃったけど、まさか晴美がこんなに嫌がってるとはねえ。晴美。お婆ちゃんのとこでよかったですら、何日でも泊まっておいき。信一郎、お母さんもお母さんだ。晴美が塾をサボって来た時に、どうしてすぐに追いかけてくれなかったんです。変な避難所作っちゃったから、勉強に身が入らずに。・・。

菊枝、嫌がるものなら、やらせなくたっていいじゃないか。信一郎、何度言ったら分かるんです。日本は学歴社会なんです。女の子にも立派な学

歴が必要なんですよ。

菊枝 学歴の高い和子さんのようにしようと

信一郎 いうのかい。姑を姑とも思わない女にさ。んだ。お母さんとは話にならん。さ、行く

晴美 行かない。行かない。

信一郎 来るんだ。(強く引っ張る)。

晴美 (抵抗する)。

翔太 (見かねて割って入る)。

信一郎 何するんですか。

翔太 家族のことだ。口出すまいと思ってた

けどよ、やっぱあんたのここおかしいよ。

信一郎 どうしてですか。

翔太 学歴付けるのは何のためだよ？

信一郎 晴美の幸せ願うからです。

翔太 その晴美ちゃんが、不幸だと言ってる

んじゃねえか。

信一郎 まだ子供なんですよ。

翔太 へえ、子供かね。おいみんな、晴美ち

ゃん子供かね。

ジヤネ 晴美、マタリノね。  
松次郎 聡明ということたい。この年で、進  
みたか道ば持つとるのは見上げたもんだ  
い。  
信一郎 進みたい道？  
翔太 知らねえのかい。それが子供の幸せ願  
う親の言葉かよ。  
菊枝 晴美はね、インテリアのやる、デザイン  
がやりたいんだよ。  
晴美 インテリア・デザイン。私、大学に行  
くの嫌じゃない。だけど、偏差値の高い  
学校なら何処でも好いとは思わないの。  
美術系に進みたいの。  
信一郎 美術系？  
晴美 家具や照明に興味があるの。美大に行  
かせてくれるなら、勉強する。  
信一郎 そんなこと一度も言っでなかつたじ  
ゃないか。  
晴美 一度だって、私の話聞いてくれたこと  
あった。二人とも働きに出て、かまっで

くれたことなかったじゃない。話し相手  
のお婆ちゃんは追い出しちゃうし。もう  
私、家には戻らない。  
翔太 このままで行くと、晴美ちゃん、非行  
に走っちゃうかも知れねえな。  
信一郎 脅すんですか。  
翔太 好い例が此奴さ。  
茂夫 え、俺？  
翔太 親父、高校の校長先生。だけど、此奴  
に脳みそ分けそこなったことに気付かな  
いで、勉強勉強と攻め立てたわけ。結果  
此奴は暴走族に仲間入り。臭い飯も、二  
度三度。その名残で今タクシの運転手  
やっつてんの。な、そうだよな。  
茂夫 へ？  
翔太 (茂夫の足を踏みつける)。  
茂夫 (顔をしかめつつ) そうそう、江ノ島  
までのツリーング、楽しかったなア。磯  
の香りがプーンときちやっつて。お陰で親  
とはそれ以後音信不通。今だに顔も見た

くねえや。ひとり息子だけど、介護なん  
ぎ、してやるもんか。  
翔太 そういえば、晴美ちゃん、一人っ子だ  
ったよな。  
松次郎 年若い子供に邪険にされるほど辛  
かことはなかぞ。  
晴美 私、不良になります！  
信一郎 何を馬鹿な。あなた方は、一体何な  
んですか。分かりました。今日のところ  
は引き上げます。美大の件は、改めて妻  
と相談して・・・。（行こうとする）  
翔太 ちよつと待ちなよ。  
信一郎 まだ何かあるんですか。  
翔太 婆さん一人、こんなぼろアパートに住  
まわせといて好いかい。  
信一郎 晴美を大学にやろうと思えば、経済  
的な問題もありまして。  
菊枝 私は我慢するよ。その代わり、晴美を  
行きたいところに行かせてやっておくれ。  
好いかい。偶には、和子さんにビシッと

言っておやりよ。

松次郎 昔はよかったたい。君に忠、親に考  
ぞ。日本男児は心得ておったもんたい。  
信一郎 (カバンとスケッチブックを置いて  
去る)。

ジャネ (信一郎が階段を下りるのを確認し  
て) 間違はなく、帰えたね。

一同 イエイ。(互いにハイタッチ)。

菊枝 しかし、シゲさんが元暴走族とは思わ  
なかつたね。

茂夫 嘘。嘘。俺の親父、八百屋の大将。

翔太 此奴に族やれる根性あると思う。

菊枝 ないね。

ジャネ イッツ・ライト。

一同 (ドツと笑う)。

翔太 それにしても、爺さん役者だね。よく  
話合わせたよ。

末次郎 おいは、思うたまでを言うたまでた  
い。ま、役者言うたら、昔上原兼ごたる  
言われたことがあったたい。

晴美 誰、その人？

菊枝 加山雄三のお父さん。

晴美 その人も知らない。

末次郎 悲しかねえ。年号が平成に変わって、  
ますます大正は遠うなっしてしもうた。

一同 (笑う)。

晴美 小父さん、ありがとう。(手を出す)。

翔太 (握手して) だけど、その小父さんて  
えのが気に入らねえな。

ジャネ 兄貴どこから見ても、小父さんよ。

一同 (再び笑う)。

ジャネ でも、兄貴の悪知恵最高ね。

翔太 褒められてんのかね、それって。

ジャネ オブ・コース(ハグしようとする)。

翔太 (するりと躲す)。

ジャネ 兄貴・・・。

翔太 悪魔撃退したんだ。乾杯と行くか。

一同 おお！

翔太 ただし、料金は貰うからな。

一同 ええ！

第九場

(紗幕が降りて、寸劇入りのコーラスとダンス)

♪ 俺たちタクシー・ドライバー

乗り込む二人の行く先は

石川町のラブホテル

「ええ、此処に入るの」

「さっさと降りてよ」

「まだ早いよ」

「付き合って三か月よ。我慢できない」

「分かった。やるよ。やるよ」

「まさか初めて？」

「実は・・・」

「たっぷり指導して上げるわよ」

♪ ああ、笑うに笑えぬ身が辛い

でも、この仕事は止められない

俺たち浜のドライバー

（上手の部屋に翔太。缶ビールをあおりながら、右往左往している。テーブルに空になった缶の山と小銭の山）

翔太

そんなことはない。俺は獣か。違う。違う。ジャネットは妹だ。（飲み干し、次のビールを冷蔵庫から取り、ポケットをまさぐり、小銭を出してテーブルの上をまさと置く。またも飲み干して、テーブルに突っ伏す）。

（妖艶な曲。洋服ダンスの扉が開いて、大胆な衣装に身を包んだジャネットが現れる。翔太の周りでセクシーに踊る。まるで翔太を誘惑するよう。翔太目覚めて、ジャネットを追いかけようとするが、その度にジャネットはすり抜ける。やがて洋服ダンスの中へ消える）

翔太

（呆然と）ジャネット・・・。

（紗幕が降りて、寸劇入りのコーラスと

ダンス）

♪ 俺たちタクシー・ドライバー

今日の運勢よかったはずが

シヨートばかりで売り上げが

「ああ、ロングの客はいねえかな」

「そっちも上がったりか」

「バブルの頃が懐かしいや」

「規制緩和がくるってよ」

「またもお客の奪い合いか」

♪ ああ、不景気が身に滲みる

でも、この仕事止められない

俺たち浜のドライバー

第七場

（座敷にジャネットと明美。その前に、

小腰をかがめた松木と舎弟の黒田。二人は、見るからに暴力団員風。

松木 ジャネット。さ、立つんだ。

ジャネット (イヤイヤ)

黒田 てめえ、兄貴の言うことが聞けねえのかよ。

松木 おい、また痛え目見せてやんな。

黒田 へい。(手を上げる)

明美 何するんだよ。

黒田 なんだおめえは。

明美 ここは私ン家だよ。ズカズカ上がり込

んで、礼儀つてももの知らないのかい。しかも土足で。

松木 成程理屈は合ってたア。だが、急いで

るんだ。許して貰おうか。

ジャネット 助けてよ、アテ。

明美 姉さんじゃないよ。あんたは居候さ。

松木 勝手に揉めるな。ジャネットにや貸し

があるんだ。まだまだ働いて貰わねえと

な。

ジャネ お金稼いだよ。

黒田 まだまだ足りねえんだよ。

ジャネ それないよ。

（翔太が走って来る。後を追って茂夫。二人とも勤務服。中に飛び込む。黒田は、拳銃を出して身構える）

黒田 誰だ、てめえは。

翔太 そっちこそ誰だ。

ジャネ 兄貴！

黒木 兄貴だと。

翔太 そうよ、ジャネットの兄貴よ。

黒木・黒田 兄妹？（顔を見合わせ、プツと

噴き出す）

翔太 いろいろ事情があるんだよ。

黒木 そうかい。そんな話が早えかもな。

ジャネットには借金があるんだ。だからな、

連れて行って働かせる。文句ねえな。

翔太 借金！

ジャネ 日本来たかたよ。それで、百万借りたよ。でも、働いて返したよ。ダンサーやたよ。いやらしい衣装着せられて、踊ったよ。

黒田 分からねえ女だな。利子つてもんがつくんだと、何度言ったら分かるんだよ。

茂夫 その利子って？

黒田 おめえは何だよ。

茂夫 ジャ、ジャネットの友達だよ。で、幾

らなんだよ。

松木 負けて百万だな。

茂夫 倍じゃねえか。

松木 俺たちの世界の相場だよ。

黒田 文句あんのかよ。（茂夫の頬を拳銃で

叩く）

茂夫 ヒー。

松木 じゃ、連れてくぜ。（ジャネットを引

き立てる）

翔太 待て。

松木 お兄さんが払おうとでも言うのかい。

翔太 (チラリ小机を見る)

明美 (慌てて小机を隠し) そんなお金ある

もんか。連れて行くなら、連れて行きな。

松木 お許しが出たぜ。行くぜ、ジャネット。

ジャネット 嫌だ。もうお客取りたくない。

茂夫 お客!

松木 ダンスはいわば張り店よ。そこでお気

に 入りを選んでもらって、別室へと言う

の が家のシステムさ。

ジャネット 嘘つき。マニラ出る時、ダンスして

稼げる。お金すぐ返せる言うたよ。日本

来たら、監視されて、客取らされたよ。

翔太 何でそんなこと・・・。馬鹿野郎。

ジャネット いや言ううたら、バンバン殴るよ。

黒田 ミカエラと私、いつも痣だらけよ。

その痣客に優しくなめて貰ったんだろ。

ジャネット オー、ノー。言わないで。

松木 世話焼かせるねえ。同じ脱走組のミカ

エラは、戻って殊勝に働いてるぜ。

ジャネ 兄貴。許してよ。したくてした違うよ。

翔太 ・ ・ ・ ・ 。

ジャネ 許してくれないね。許して ・ ・ ・ 。

松木 結論が出たぜ。邪魔したな。(引っ立

てようとする)。

ジャネ (絶望的に) 兄貴!

翔太 (明美を押しつけ、通帳と印鑑を取り出す)。

明美 これは私たちのお金だよ。こんなことに使えるもんか。(奪い取る)。

(二人、通帳を奪い合う)

黒田 夫婦喧嘩やってんじゃねえよ。

松木 金があるなら、そっちの方が面倒なく

明美 渡すもんか。

黒田 てめえ。兄貴の言うこと聞けねえのか

（拳銃を向ける）。

明美 ヒー。

ジャネ （黒田を突きつけ、明美を庇う）何  
するよ。アテ撃つか。撃つなら、私撃て  
よ。

明美 ジャネット。あんた・・・。

ジャネ たった一人の姉さん、私のため撃た  
せる訳行かないよ。さ、打てよ。打てよ。

明美 ジャネット！

黒田 糞。舐めるんじゃないぞ。（狙いをつ  
ける）。

（壁の向こうで、物の壊れる音。「助け  
てー」という順一の絶叫。順一を追いか  
けて、愛人三人がこちらに雪崩混んで来  
る。小百合は、手にフライパン。恵は播  
り粉木棒。明日香は包丁を持っている）

順一 助けてー。バレちまったよオ。

恵 よくも騙したわねえ。

小百合 本命は君だけだなんて、皆に言っ

るじゃない。

明日香 おかしいと思っただ。こんな小娘

らと乳繰り合っていたなんて。

恵 食べたもの吐き出さないよ。みんな

私が貰いだものよ。

小百合 お金返して。バイト代、皆つぎ込ん

だのよ。

明日香 誰のおかげで大学続けられているの

よ。スーツだって、私がプレゼントした

んだから。よくも、よくも。(包丁で切

りかかる)

順一 キャア。殺される。

恵 これでも食らえ。

小百合 馬鹿野郎。

(三人は、松木・黒田の周りを順一を

追って駆け巡る)

松木 何だ、てめえ達は。

順一 助けて下さいよ。(黒木に抱き着く)。  
黒田 馬鹿。止せ。(誤って発砲する)  
ジャネ きゃー。(絶叫とともに倒れる)  
翔太・明美 ジャネット!  
全員 (凍り付く)

(遠くパトカーのサイレンの音)

(紗幕が降りてくる。今回は♪「タクシ  
ー・ドライバー」のハミングのみ。ゆっ  
くりとした曲調。やがて紗幕が上がる)

## 第十場

(座敷でジャネットが、衣類をバック  
に詰めている。右手に包帯。立ち合いの  
出入国管理事務所の係官二人。それと向  
かい合って、翔太と明美。上手の部屋に  
茂夫、幸三、順一、菊枝、松次郎、晴美  
たち。順一は片手、片足に包帯。松葉杖

をついでいる)

ジャネ 私、半分日本人よ。日本居ることな  
ぜいけない。兄貴と同じ血流れているよ。

係官一 でも、君の国籍はフィリッピンしか  
ないんだから。

翔太 むしろジャネットは被害者じゃねえの  
かよ。

係官二 同情はしますが、入国は観光ビザ。

現在までいることは、不法滞在に当たり  
ます。

係官一 それに不法就労、売春禁止法違反が  
加わります。

ジャネ 日本人ずるいよ。お金でフィリッピ  
ンの女買うよ。子供産ませて、都合悪く

なるとバイバイよ。フィリッピンには私  
と同じ子供沢山いるよ。でも、日本何に

もしてくれない。日本来たくとも、私た  
ちお金ない。その心利用する人、それま

た日本人よ。私たちに体売らせるよ。

翔太 国は、そんな子供たちの面倒は見ねえのかよ。

係官一 民間人の行為には、国家は一切責任を負いません。

翔太 可哀相じゃねえかよ。

明美 (たしなめる)。

係官二 幾ら文句を言っても、駄目なものは、駄目なんです。

翔太 だけどよう。

明美 (衣服を引く)。

ジャネ 兄貴。もう好いよ。兄貴の心、嬉しいよ。御免ね、兄貴。私、恥ずかしい妹よ。現れなければ、好かたね。でも、どうしてもヤマカンドな人か会いたかたよ。家族にも会いたかたよ。

係官一 では、行くぞ。

ジャネ (立ち上がる)。

一同 ジャネット！

ジャネ 世話なたね。楽しかたよ。

幸三 聞いてよろしいでしょうか。例の二人

は？

係官二 収監しました。店もガサが入り、バ

ツクの組織も摘発されました。

茂夫 また来りや好いや。待ってるからよ。

係官一 再入国はできません。

茂夫 嘘。

順一 法を犯してるから。

一同 ほう。

菊枝 見納めになっちゃうのかい。

ジュネ ローラ。あの時兄貴に知らせてくれ

て有難う。

松次郎 おいのマリアの離れて行くときよ。

晴美 ジャネット。

ジャネ 絵の大学、きと入るね。

晴美 約束する。

順一 僕、ジゴロ止めたよ。バイトしながら、

就活する。

明美 ジャネット、庇ってくれて嬉しかった

よ。私のために撃たれたようなもんだ。

ジャネ 姉妹庇うの、当たり前のことよ。

明美 何て優しいことを・・・。

係官二 もう好いだろう。

ジャネ 行くよ。見送り要らないよ。送られ

ると、辛いよ。

一同 ジャネット！

（ジャネットは、深々とお辞儀をする。

顔を上げたとき、翔太と目が合う。二人、

じっと見つ合う。やがて思い切るように

ジャネットは、部屋を出る）

係官一 またんか。

係官二 こら。

晴美 ジャネット。（共に追いかける）。

明美 あんた、追わなくて好いのかい。

翔太 （行こうとするが、立ち止まる）。・・・

松次郎 まっこつ気立ての優しか娘だったと

たい。

菊枝 カモテキュー、もう食べられないんだ

ね。

茂夫

幸三

この世は常に弱者にしわ寄せが来るんです。この戦後は常に弱国には、日本人は戦前ですな。特にかの国には、日本人は戦前戦後、多大な迷惑をかけて来ました。戦前は軍事力をもってかの国の国民を支配し、戦後は経済力をもって、企業戦士の名のもとに、かの国の弱きを凌辱して来たんです。買春。これは、否定することのできない歴史的事実であります。いや、この風潮は、いまだ続いておると言ってます。戦前のそれに、何らかの補償とODA等による援助があります。戦後のそれには、いまだなんの補償も救済も行われてはおりません。ジャネットは、その犠牲者の一人だ。言ったと言った。よいのではないでしょう。か。現在日本はまたもアジアへと目を向け始めています。しかし、それが市場獲得のためばかりであつたとしたら、それ

はバブルの時と何ら変わりがなideしよ  
う。彼の国の人々の人権を敬い、ともに  
アジアの一員として、パトナー・シッ  
プを分かち合う関係が生まれてこそ日本  
のアジア進出は認められるべきです。私  
は、そのことを切に願って止みません。  
茂夫 何か高尚なこと言ってるようだけど、  
セクハラ教授が言うところ、胡散臭く聞こえ  
るんだよなア。  
幸三 ですから、あれは嵌められて・・・。  
明美 ああ、陰気になって来ちゃったね。ジ  
ヤネットの向こうでの幸運を祈って、ビ  
ールでも飲もうよ。(ビールをテーブル  
に並べる)  
明美 さ、飲もう。  
一同 (手を出そうとして、一斉に引っ込め  
る)。  
明美 大丈夫だよ。お金は取らないって。私  
の奢りさ。  
一同 (案心して飲み始める)。

明美 あんた。(缶を差し出す)。

翔太 (受け取らない)。

明美 やっぱ裏があったね。でも、これで

踏ん切りがついたろう。ぶっつり邪念も

消えたはずだ。いい時に消えてくれた。

夫婦の危機だったもんね。さ、飲んで忘

れよう。今日から私たち水入らずの夫婦

生活に戻るんだ。(再び缶を突き出す)。

翔太 (逸らして、ベランダへ行く)。

明美 あんた。

茂夫 明美さん。明美さんこそ飲もうよ。

明美 有難う。ところでシゲはどうするのか。

追いかけてマニラに行くかい？

茂夫 御免。客を取ってたって聞いて、心が

しなえちゃってよ。

明美 ふん。お前の愛情ってそんなもんか。

(晴美が戻って来る。翔太を探し、ベラ

ンダに行く)

晴美 小父さん。ジャネットが、言い残した  
ことがあるって。  
翔太 俺に？  
晴美 今度生まれる時は、他人で生まれた  
って。  
翔太 今度生まれる時は、他人で・・。  
明美 なら、ジャネットもあんたを男として  
・・。  
順一 どういうこと？  
明美 あんたには関係ない話。  
翔太 そうか、ジャネットも・・。晴美ち  
やん。有難うな。  
菊枝 晴美。あんたはジュースで好いね。(一  
冷蔵庫を開ける)。  
翔太 银杏の葉っぱの芽吹いたところに春風に  
乗ってやって来て、色づき始めたころに  
台風に乗って去ってしまった。まるで夢  
のようだ。馬鹿野郎が、犯罪者になりや  
がって。ジャネットの大馬鹿野郎。(涙  
がとめどなく溢れる)。

明美 あんた・・・。  
一同 （悄然となる）。

（翔太の叔母の恒子がやって来る。リュックを背負っている）

恒子 いた、いた。いやア、いつきても此処のアパートは分かりずらいね。

明美 叔母さん！

恒子 あんれ、明美さん。いつ戻ったんだ。そうか、そうか、元の鞆に納まったか。そりや何よりだ。

翔太 （涙を拭い、座敷に戻り）叔母ちゃん。何で？

恒子 彼岸に戻ったら、例のお墓の話すべえと思つてたによ。一向に見えねえから、そんならこつちから、横浜見物がてら、ちよつくら出かけてみっぺと思つてよ。そうだ。土産だ。干瓢と宇都宮餃子。

一同 おお餃子だ。

茂夫 アテにもってこいだ。  
恒子 おや皆さん、こんなに沢山。宴会やつ  
てるところだっぺか。喉乾いてるんだ。  
ちよっくら一杯。  
幸三 どうぞ、どうぞ。  
恒子 (一気に飲み干す) ああ、美味え。  
明美 大丈夫？  
恒子 酒飲みの系図だったこと、知ってっぺ。  
あッ。挨拶忘れてたなや。私、翔太の叔  
母の恒子言うもんで。  
一同 (頭を下げる)  
恒子 翔太。何辛気臭え顔して立ってるだ。  
宴会なら、パツとやれ。パツと。さ、皆  
さんも、パツと。  
順一 そんなに明るくパツとといわれてもな  
ア・・。  
松次郎 そこまで明るくはのう。  
恒子 あいや、ほんじゃ、これはお通夜の席  
だっぺか？  
菊枝 ま、そんなものかねえ。

晴美 小父ちゃんの兄妹が、さっきマニラに

連行されたの。

恒子 マニラに。おお、ほんじゃいつか電話

してきた兄さんの子、日本へやって来た

だか。いんやア、おらも会いたがったな

ア。さぞや立派な男になったんべえ。

一同 男！

恒子 確か男のはずだ。間違えねえ。もう一

人のヤマカンさんちのが女の子で、兄さ

ん家のが男の子。翔太の親父が山本貫太

郎。向こうが山田完四郎とってな、ど

っちも遊び人で、二人ヤマカンなんて呼

ばれていたもんよ。これが似た者同士で、

気が合ったもんか義兄弟の杯交わして、

つるんでマニラあたりへちよくちよくと

出かけていたもんだ。

茂夫 じゃ、ジャネットと兄貴は兄妹じゃな

かったんだ。

翔太 じゃ、翔子と言うのは？

恒子 おめえの親父が名づけ親になったんだ

つぺ。兄さん、おめえに名付けたぐれえ  
に、「羽ばたく」って字が好きだったか  
らなア。  
翔太 ええ！  
恒子 それが、どうかしたっぺか。  
明美 兄妹じゃなかったんだ、ジャネット。  
翔太 ジャネットは・・・。ジャネットが兄  
妹じゃない。  
明美 (強く) あんた。  
翔太 分からねえ。分からねえよ。どうした  
らいいのか、分からなくなっちゃったよ  
オ。(再びベランダへ行く)  
恒子 翔太どうがしたんだっぺか？  
明美 (一同に) 悪い。皆、場所移してくれ  
る。  
一同 ええ。  
明美 夫婦の大事な話があるんだ。  
菊枝 なら、私の部屋へ移ろう。  
明美 冷蔵庫の中の物、皆持ってっていいか  
ら。ついでにおばさんも運んでいって。

恒子 あれ、俺もかい。  
明美 さ、行った。行った。

（一同、ゾロゾロト去る。遠く汽笛の音。明美はじっと翔太を見つめる。翔太、動かない。明美は決心をし、押し入れを物色し、通帳と判子を出す。座敷に正座し、翔太を呼ぶ）

明美 誰もいなくなった。こっちへおいでよ。話をしよう。

翔太 （座敷に戻る）。  
明美 （努めて明るく）好かったじゃないか。

ジャネットが兄妹じゃなくて。これ、返すよ。

翔太 え？  
明美 腹は決まってる。マニラに行くのに必要だろう。顔に書いてあるよ。

翔太 それじゃ、おめえに・・・。  
明美 私も腹を決めた。あの子は、私のため

に的になろうとした。いわば命の恩人だ  
よ。恩人のためだったら、旦那の一人や  
二人譲ったって。  
翔太 すまねえ。この通りだ。(両手をつく)  
明美 時代劇じゃあるまいし、大げさだねえ。

責任感じなくてもいいよ。実を言うと、  
あんたを責められない事情があるのさ。  
先に捨てたのは、私の方なんだから。  
翔太 え？  
明美 家出じゃなかったんだよ。駆け落ちだ

っただ。綺麗な男。そいつと函館で暮らしてたんだ。  
だ。ところが此奴、あんたに輪をかけた  
道楽もんでさ。これなら、まだあんたの  
方がましかなって、舞い戻って来たわけ。  
虫のいい話だよ。だから、私への気遣  
いは結構。好きなようにしていいんだよ。  
翔太 明美！  
明美 今度生まれる時じゃなくって、この世  
で一緒になっちゃりなよ。

翔太 本当にそれで好いのか。

明美 体は汚れていても、たとえ犯罪を犯していても、女は心のどこかでピユアな部分を残しているもんさ。あんたはそれを信じてやれば好い。

(菊枝の部屋で、盛り上がる声)

明美 腹水盆に戻らずとはよく言ったものだね。どれ、私も宴会に参加するか。

(明美は去る。翔太は、通帳と印鑑を握りしめ、明美の去った方に深々と礼をする。ジャネットの声がする)

ジャネの声 兄貴。私、ピユアじゃないけど、兄貴大好き。これ、間違いないよ。マニラおいでよ。暑いけど、いい所よ。人皆のんびりよ。とても仲好いよ。一緒に住めたら、ジャネット、最高よ。

翔太

じゃない。今はっきりしているのは、お前が大好きだということだ。マニラに行くよ。個人タクシ―の夢は諦めた。三輪車のタクシーの運ちゃんになって、二人の生活始めよう。休みの日には、親父たちの巡ったところを訪れて、恨みの限りを言っ  
てやろうじゃないか。待ってろよオ。――東南アジア風の音楽。座敷の壁が飛んで、そこに満点の星空。その下で、トライクに乗ったジャネットが、手を振っている。音楽の高まる中に……)

幕。